

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K10419

研究課題名(和文)性の多様性をふまえた看護教育の実現に向けた課題の検討

研究課題名(英文) Investigation of issues for realizing of nursing education based on gender diversity

研究代表者

津田 朗子 (Tsuda, Akiko)

金沢大学・保健学系・教授

研究者番号：40272984

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：性の多様性をふまえた看護教育の在り方を検討するため、医療系大学生のセクシュアルマイノリティに対する意識と関連要因を調査した。

725名(86.3%)の回答の結果、セクシュアルマイノリティに偏見がある者は19.9%で、これらの者は潜在意識テスト(IAT)得点が高かった。顕在的意識は直接関わった経験、関心、心理的距離感、受容度と、潜在的意識は情報を見聞きした経験、知識、心理的距離感、受容度と関連していたが、いずれも「学校で学んだ経験」との関連はみられなかった。

セクシュアルマイノリティに対する学生の意識を発展させていくには、学生が自ら考える教育内容・方法の工夫が必要であると示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、医療系大学生のセクシュアルマイノリティに対する意識を、顕在的意識、および「社会的望ましさ」の影響を受けない潜在的意識の2側面から調査し、意識とそれに関連する要因を明らかにしたものである。得られた成果は、これから医療者となる学生を教育する上で、人の尊厳と多様性を深く洞察する目を養う教育のあり方を検討するための資料として活用できるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In order to consider education for nursing students, it was investigated the consciousness of undergraduate students against sexual minorities to clarify the awareness of students towards sexual minorities and related factors.

Responses were received from 725 students, 19.9% of them had negative consciousness against sexual minorities, and their IAT scores were higher than those of students who didn't have negative consciousness. Recognized consciousness was related to directly involved experience, knowledge, interests, psychological distance, acceptance. Potential consciousness was related to experience of gaining information, knowledge, psychological distance, acceptance. There was no relation between both consciousness and experience of learned at school. It was suggested that it is necessary to devise students' interests not only knowledge but also contents and methods of education that provides them the opportunity to think themselves.

研究分野：小児看護

キーワード：性の多様性 看護教育 LGBT SOGI

1. 研究開始当初の背景

近年、セクシュアルマイノリティに対する社会の関心が高まり、性の多様性に配慮した教育環境の充実が求められるようになってきた。これには、セクシュアルマイノリティに対する社会の無理解や偏見を背景とした深刻な問題¹⁻²⁾が明らかにされてきたことが関連しており、このようなデータは諸外国及び日本の調査において多数報告されている。彼らは自分で選ぶことのできない性的指向(どの性別を恋愛の対象とするか)や性自認(自身の性別をどう認識するか)等のために、日々様々な困難に直面している。LGBT 法連合会による「性的指向および性自認を理由とするわたしたちが社会で直面する困難のリスト(第3版)」には、セクシュアルマイノリティにとっての困難が数多く挙げられている³⁾。特に若年層においては、自分自身を否定的に捉えることによって自尊感情の低下を招き、いじめや暴力、不登校⁴⁾、自傷・自殺未遂⁵⁻⁶⁾など深刻な問題に繋がることが指摘されている。このような状況を踏まえ、セクシュアルマイノリティに配慮した支援体制や教育体制が求められている。

これに対して学校教育においては、2015年に文部科学省が「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」⁷⁾を通知し、セクシュアルマイノリティへの配慮は学校保健の課題と認識されるようになってきている。大学においても、セクシュアルマイノリティに配慮した支援体制や教育環境の充実が進められているが、実際には大学間格差が大きいことが指摘されている。

また、医療の場においてもセクシュアルマイノリティへの理解が不足していると考えられる現状が報告されている⁸⁻⁹⁾。セクシュアルマイノリティの人々にとって受診時の手続きや診療場面における配慮のなさは、健康障害による苦痛以上に不安や嫌悪を感じる場となっており、それが医療へのアクセスを困難にする大きな要因となっている。したがって、医療者はこれらの問題に関心を寄せ、医療者自身も意識的に取り組んでいく必要がある。

医療現場には疾病や障害により生きにくさや差別に晒されている人が多く存在しており、医療者は、そのような人々に直接かかわる専門職である。したがって、看護職など医療に従事する者は「マイノリティ」に対する偏見・差別に敏感であることが求められ、そのためには自身の意識に対しても関心を寄せる必要がある。このことは、将来医療従事者をめざす学生の教育においても非常に重要であると考えられる。

したがって、本研究では、将来医療従事者をめざす医療系の学生がセクシュアルマイノリティに対してどのような意識を持っているのか、またそれにはどのような要因が関連しているのかを明らかにし、今後の医療や看護教育を検討するための資料としたいと考える。

一方、意識には顕在的意識と潜在的意識の2つの側面があるとされ、顕在的意識はある程度統制が可能な行動を規定し、潜在的意識は姿勢の緊張度合い等の統制困難な行動を規定する¹⁰⁾。本人の自覚による意識(顕在的意識)は、少なからず社会的望ましさに影響され、特に、偏見、差別などネガティブな側面への意識を調査する場合には、アンケート調査では回答に対する「社会的望ましさ」を除外することができていないと考えられる。医療系の学生では一般人と比較し平等思考や共感的態度を強く示すとの報告¹¹⁾からも、意識調査研究においては、本人の自覚による意識(顕在的意識)だけではなく、無意識的な感情(潜在的意識)も含めた視点が必要と考える。そこで、本研究では、医療系大学生のセクシュアルマイノリティに対する意識を顕在的・潜在的2つの側面から調査し、意識とそれに関連する要因を明らかにする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、医療系大学生のセクシュアルマイノリティに対する意識を顕在的・潜在的2つの側面から調査し、意識とそれに関連する要因を明らかにすることである。本研究の成果は、これから医療者となる学生を教育する上で、人の尊厳と多様性を深く洞察する目を養う教育のあり方を検討するための資料として活用できるものとする。

用語の定義

セクシュアルマイノリティ：レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー等、「生物学的性と性自認が一致し、性的指向が異性のみである」者以外の者。

3. 研究の方法

1) 対象：地方都市の1大学の医療系5専攻の全学生1~4年生838名のうち研究への同意が得られた者。

2) 概念枠組み(図1)

3) 調査内容：調査項目は先行研究¹²⁻¹³⁾を参考に作成

(1) 関連要因：経験(4問) 知識(6問)

経験では、「マイノリティについての情報を見聞きしたことがあるか」等、マイノリティに関する経験について、「よくある」から「一度もない」の4段階で回答を得た。知識では、「LGBT/SOGI(Sexual Orientation and Gender Identity)という言葉とその意味を知っているか」について、「言葉も意味も知っている」「言葉は知っている」「言葉も意味も知らない」の3段階で回答を得た。また、「日本では同性愛・両性愛は医学的に疾病として分類されている」等の正誤問題は、「正しい」「誤っている」「わからない」の3項目で回答を得た。

(2) 態度：関心(4問) 心理的距離感(4問) 受容度(7問)

「マイノリティについて知識を身につけたいと思うか」等、関心の高さは「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の4段階で、「マイノリティとは距離を置きたい」等の心理的距離感や「性の在り方は自由である」等の受容度については「非常にそう思う/賛成」から「全くそう思わない/反対」の5段階で回答を得た。

(3) マイノリティに対する顕在的意識

「偏見があると思うか」という質問に対し「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の5

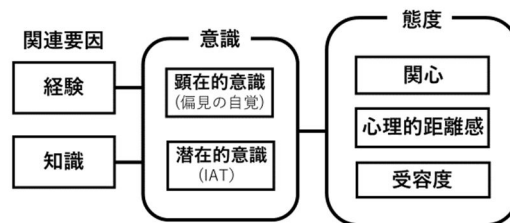


図1 セクシュアルマイノリティに関する意識の概念図

段階で回答を得た。

(4) マイノリティに対する潜在的意識；潜在的連合テスト (Implicit Association Test : IAT) 潜在的意識は、Greenwald ら (1998) ¹⁴⁾ によって考案された IAT を用いて調査した。これは、実験参加者の意思にコントロールされない潜在意識を測定する心理テストで、心理学分野の研究で一般的に活用されている。表示された単語を 2 つの異なる次元のカテゴリーに分類するテストを 4 パターン実施し、その得点の差から得られる数値によって潜在意識の高さを測定する。本研究では数値が高いほどマイノリティに対する否定的感情が強いことを示す。

5) 調査手順

管理者の同意を得た上で研究者が対象学生の講義室へ直接出向き、講義終了後(一部は開始前)に実施した。研究の目的・概要、倫理事項および途中退席が可能であることを説明した後、IAT を研究者の指示に従い一斉に回答してもらった。なお IAT に関しては、4 パターンの提示順序による偏りを避けるため、提示順序ごとの回答者数が学年、専攻内で等しくなるように配布した。その後、他の調査項目に回答してもらった。調査用紙は全ての調査終了後にその場で回収した。

6) 分析方法

全てのデータは、学年別に単純集計し、分布を確認したうえで統計学的に処理した。マイノリティと関わった経験については、関わりや親密度から「関わりがあり親しい」「関わりはあるが親しくない」「関わりがない」の 3 群に分類した。知識は、回答の正誤を得点化し、全体平均により「知識あり」「知識なし」の 2 群に分類した。関心も回答を得点化し、全体平均より 2 群に分類した。顕在的意識は「偏見がない」「どちらでもない」「偏見がある」の 3 群に分類した。IAT 得点は統計的・視覚的に分布を確認した。顕在的・潜在的意識との関係は一元配置分散分析、多重比較は Bonferroni 法を用いた。関連要因、態度について顕在的意識との関係は χ^2 検定、IAT との関係は一元配置分散分析、t 検定を用いた。分析には SPSS Ver.25 を用い、有意水準は 5% とした。

7) 倫理的配慮

本研究は、金沢大学医学倫理審査委員会の承認を得て実施した。対象者に当事者が含まれていることを考慮し、文書の表現は専門家の助言を得て検討した。対象者には 研究目的、方法、研究参加の自由、途中退出の自由、研究不参加や途中退出による不利益が生じないこと、質問紙は無記名で行い、プライバシーの保護を厳守すること、本研究で得たデータは本研究の目的以外に使用しないこと、調査用紙はそれぞれ施錠された机に保管し、漏洩、盗難、紛失等が起こらないように厳重に管理することを口頭と文書にて説明した。

4. 研究成果

725 名から回答が得られ (回収率 86.5%)、有効回答数は 722 名であった (表 1)。

1) マイノリティに関する経験、知識の実態

(1) マイノリティとの関わりや学習の経験 (表 2)

マイノリティと関わった経験のある者は 31.9%、情報を見聞きした経験がある者 76.7% で、情報源は「テレビ」73.3%、「ネット」38.9%、「書籍」28.8% であった。一方、マイノリティを話題にした経験がある者は 25.5% であった。学校で学んだ経験がある者は 57.6% で、教育機関別にみると大学の一般教養が 29.4%、高等学校が 26.2% であった。学んだ経験には学年による差がみられ、1、2 年生は 4 年生より学んだ割合が高かった。

表1 属性

学年	1年生	188(26.0)	専攻	看護	278(38.5)
	2年生	202(28.0)	放射	154(21.3)	
	3年生	188(26.0)	検査	152(21.1)	
	4年生	144(20.0)	理学	79(10.9)	
			作業	59(8.2)	

n=722 数値は人数(%)を示す

(2) 知識 (表 3-1,2)

「LGBT を知っているか」の問いに「言葉も意味も知っている」は 59.7% であったが、「SOGI」では 5.0% であった (表 3-1)。「SOGI」では学年による差がみられ、1 年生は 2~4 年生より認知度が高かった。また、LGBT、SOGI の言葉を知っている者は、知らない者に比べ正誤問題の正答率が有意に高かった。最も正答率が高かったのは「同性愛、両性愛は疾病に分類される」(正解:誤)であった。一方「日本では現在、一部の自治体で同性カップルの婚姻が認められている」(正解:誤)は 44.3% が誤答であった。「日本人の 13 人に 1 人はマイノリティである」という調査報告がある」(正解:正)はわからないとの回答が 73.4% であった (表 3-2)。

表2 マイノリティに関する経験の実態

	関わりがあり親しい	関わりがあるが親しくない	関わりがない
マイノリティとの関わり*	118(16.4)	111(15.5)	489(68.1)
	ある	ない	
マイノリティについての情報を見聞きした経験**	552(76.7)	168(23.3)	
マイノリティについて誰かと話した経験	184(25.5)	537(74.5)	
マイノリティについて学校教育の中で学んだ経験	415(57.6)	306(42.4)	

n=721 (ただし *n=718, **n=720) 数値は人数(%)を示す

関わりがあり親しい:「よくある/時々ある/ほとんどない」かつ「親しい/まあまあ親しい/普通」とする
関わりはあるが親しくない:「よくある/時々ある/ほとんどない」かつ「あまり親しくない/親しくない」とする
関わりがない:「一度もない」とする
ある:「よくある/時々ある」、ない:「ほとんどない/一度もない」とする

表3-1 マイノリティに関する知識の実態(自己申告)

	言葉も意味も知っている	言葉だけ知っている	言葉も意味も知らない
『LGBT』という言葉とその意味を知っているか*	430(59.7)	131(18.1)	160(22.2)
『SOGI』という言葉とその意味を知っているか**	36(5.0)	93(12.9)	593(82.1)

*n=721 **n=722 数値は人数(%)を示す

2) 態度の実態

(1) 関心 (表 4)

マイノリティについて知識を身につけたい者は 83.0%、大学で講義があれば受けたい者は 65.5% であり、いずれも 6 割を超えていた。また、日常生活における生きづらさについて考えたことがある者は 50.7% であ

表3-2 マイノリティに関する知識の実態(正誤問題)

	正答	誤答	わからない
同性愛、両性愛は疾病に分類される	338(46.8)	47(6.5)	337(46.7)
戸籍上の性別を変えるには性転換手術が必要	238(33.0)	141(19.5)	343(47.5)
同性カップルの婚姻は認められている	159(22.0)	320(44.3)	243(33.7)
日本人の13人に1人はマイノリティである	150(20.8)	42(5.8)	530(73.4)

n=722 数値は人数(%)を示す

たが、医療を受ける際の生きづらさについて考えたことがある者は 21.3%であった。

(2) 心理的距離感 (表 5)

マイノリティと距離を置きたい者は 8.6%、知人がマイノリティだったら抵抗を感じる者は 17.9%、身近な人がマイノリティだったら抵抗を感じる者は 22.4%であった。

(3) 受容度 (表 5)

「性のあり方は自由だ」と考える者は 94.3%、「様々な家族の形があることに賛成する」者は 92.4%、「同性婚を法律で認めるべきだ」と考える者は 65.4%であった。また「人々はマイノリティのことをもっと知るべきだ」と考える者は 75.2%、「義務教育で教えるべきだ」と考える者は 64.5%であった。

3) マイノリティに対する意識

(1) 顕在的意識: 「自分はセクシュアルマイノリティに対して偏見がある」に対し、「全くそう思わない」と回答した者は 7.5%、「そう思わない」は 35.0%、「どちらでもない」は 37.7%、「そう思う」は 19.2%、「非常にそう思う」は 0.6%であった。

(2) 潜在的意識 (IAT): IAT について、分析が可能であった有効回答は 573 名 (有効回答率 79.4%) で、IAT 得点は 9.10 ± 8.95 (平均 \pm 標準偏差) 点であった。

(3) 顕在的意識と潜在的意識の関係 (表 6)

潜在的意識の指標である IAT 得点は、顕在的意識との差がみられ「偏見がある」者は「偏見がない」「どちらでもない」者より IAT 得点が高かった。

4) 意識と関連要因・態度の関係 (表 7)

マイノリティに対する意識と関連要因との関係について、知識では顕在的、潜在的意識のいずれにおいても関連がみられ、知識がある者は偏見がないと回答した者の割合が高く、IAT 得点も低かった。また、心理的距離感、受容度との関係についても同様に、顕在的、潜在的意識のいずれにおいても関連がみられた。一方、マイノリティに関わった経験では、顕在的意識との関連はみられたが、潜在的意識ではみられなかった。さらに情報を見聞きした経験については、顕在的意識とは関連がみられなかったが、潜在的意識と関連がみられ、情報を見聞きした経験がある者の方が IAT 得点は低かった。

表4 マイノリティに関する関心の実態

	非常にそう思う	そう思う	そう思わない	全くそう思わない
知識を身につけたい*	107(14.9)	491(68.1)	113(15.7)	9(1.3)
大学で講義があれば受けたい**	69(9.6)	402(55.9)	224(31.2)	24(3.3)
	よくある	時々ある	ほとんどない	一度もない
日常生活での生きづらさを考えた*	49(6.8)	316(43.9)	270(37.5)	85(11.8)
医療の場での生きづらさを考えた	12(1.7)	141(19.6)	360(49.9)	208(28.8)

n=721 (ただし *n=720 **n=719) 数値は人数(%)を示す

表5 マイノリティに関する心理的距離感と受容度の実態

	非常にそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
心理的距離感					
マイノリティとは距離を置きたい	4(0.6)	58(8.0)	217(30.0)	311(43.1)	132(18.3)
知人がマイノリティだったら抵抗を感じる*	11(1.5)	118(16.4)	199(27.6)	262(36.3)	131(18.2)
身近な人がマイノリティだったら抵抗を感じる	13(1.8)	149(20.6)	171(23.7)	264(36.6)	125(17.3)
身近な人がマイノリティでも同じ関係でいられる	90(12.5)	338(46.8)	213(29.5)	76(10.5)	5(0.7)
受容度					
性のあり方は自由である*	284(39.4)	396(54.9)	39(5.4)	2(0.3)	0(0.0)
様々な家族の形があることに賛成する	355(49.2)	312(43.2)	49(6.8)	3(0.4)	3(0.4)
人々はマイノリティのことをもっと知るべきだ*	139(19.3)	403(55.9)	169(23.4)	9(1.3)	1(0.1)
同性どうしの結婚を法律で認めるべきである*	123(17.0)	349(48.4)	219(30.4)	28(3.9)	2(0.3)
マイノリティについて義務教育で教えるべきだ	105(14.5)	361(50.0)	198(27.4)	54(7.5)	4(0.6)
異なる性別の服装をするべきでない	3(0.4)	106(14.7)	216(29.9)	287(39.8)	110(15.2)
同性愛は生殖に結びつかないので好ましくない	5(0.7)	28(3.9)	140(19.4)	350(48.5)	199(27.5)

n=722 (ただし *n=721) 数値は人数(%)を示す

表6 顕在的意識と潜在的意識(IAT)の関係

	n(%)	潜在的意識(IAT) 得点	p値	多重比較
マイノリティに対して偏見があると思うか				
偏見がない ¹	249(43.5)	7.78 \pm 9.08		
どちらでもない ²	210(36.6)	9.09 \pm 8.67	<0.001	3 > 1,2
偏見がある ³	114(19.9)	11.99 \pm 8.63		

数値は平均得点 \pm 標準偏差 (S.D.) を示す 一元配置分散分析 多重比較は Bonferroni

偏見がない: 「そう思わない/全くそう思わない」、偏見がある: 「非常にそう思う/そう思う」とする

表7 顕在的・潜在的意識(IAT)と関連要因・態度の関係

関連要因	n	顕在的意識			p値	潜在的意識(IAT)	
		偏見がない	どちらでもない	偏見がある		得点	p値
関連要因							
マイノリティとの関わり ^a							
関わりがあり親しい	94	53(56.4)	27(28.7)	14(14.9)	0.046	8.41 ± 9.41	ns
関わりはあるが親しくない	92	33(35.8)	41(44.6)	18(19.6)		8.59 ± 9.26	
関わりがない	385	163(42.3)	140(36.4)	82(21.3)		9.46 ± 8.68	
マイノリティについての情報を見聞きした経験 ^b							
ある	445	204(45.8)	157(35.3)	84(18.9)	ns	8.59 ± 9.02	0.010
ない	127	45(35.4)	52(41.0)	30(23.6)		10.91 ± 8.59	
マイノリティについて誰かと話した経験 ^c							
ある	149	75(50.3)	48(32.2)	26(17.5)	ns	8.55 ± 9.88	ns
ない	423	174(41.1)	161(38.1)	88(20.8)		9.30 ± 8.63	
マイノリティについて学校教育の中で学んだ経験 ^d							
ある	337	155(46.0)	123(36.5)	59(17.5)	ns	8.92 ± 9.36	ns
ない	235	94(40.0)	86(36.6)	55(23.4)		9.38 ± 8.38	
知識 ^e							
あり	340	167(49.1)	110(32.4)	63(18.5)	0.004	8.41 ± 9.31	0.026
なし	233	82(35.2)	100(42.9)	51(21.9)		10.10 ± 8.35	
態度							
関心 ^f							
あり	365	172(47.1)	127(34.8)	66(18.1)	0.049	8.69 ± 8.92	ns
なし	202	74(36.6)	81(40.1)	47(23.3)		9.79 ± 9.08	
心理的距離感 ^g							
小さい	372	217(58.3)	118(31.7)	37(10.0)	<0.001	7.95 ± 8.97	<0.001
大きい	200	31(15.5)	92(46.0)	77(38.5)		11.31 ± 8.52	
受容度 ^h							
高い	304	161(53.0)	96(31.6)	47(15.4)	<0.001	7.81 ± 8.97	<0.001
低い	266	87(32.7)	113(42.5)	66(24.8)		10.57 ± 8.77	

顕在的意識の数値は人数(%)を示す、顕在的意識とa-hの関係は χ^2 検定

潜在的意識(IAT)の数値は平均得点 ± 標準偏差を示す、潜在的意識(IAT)とaの関係は一元配置分散分析、潜在的意識(IAT)とb-hの関係はt検定

ns: 有意差無し

a 関わりがあり親しい: 「よくある/時々ある/ほとんどない」かつ「親しい/まあまあ親しい/普通」とする

a 関わりはあるが親しくない: 「よくある/時々ある/ほとんどない」かつ「あまり親しくない/親しくない」とする

a 関わりがない: 「一度もない」とする

b/c ある: 「よくある/時々ある」、ない: 「ほとんどない/一度もない」とする

e あり: 「知識得点平均点以上」、なし: 「知識得点平均点未満」とする

f あり: 「関心得点平均点以上」、なし: 「関心得点平均点未満」とする

g 小さい: 「心理的距離感得点平均点以上」、大きい: 「心理的距離感得点平均点未満」とする

h 高い: 「受容度得点平均点以上」、低い: 「受容度得点平均点未満」とする

引用文献

- 1) 平成 25 年度東京都地域自殺対策緊急強化補助事業: LGBT の学校生活に関する実態調査 (2013)結果報告書,2014.
- 2) 世田谷区生活文化部人権 男女共同参画担当課:性的マイノリティ支援のための暮らしと意識に関する実態調査,2016.
- 3) LGBT 法連合会: 性的指向および性自認を理由とするわたしたちが社会で直面する困難のリスト(第3版),2018.
- 4) 渡辺大輔: 性的マイノリティの子どもたちの現状と支援の課題, 2018.
- 5) 中塚幹也: 『学校の中の性別違和感を持つ子ども - 性同一性障害の生徒に向き合う』,2013.
- 6) 日高庸晴: 【LGBT を正しく理解し、適切に対応するために】ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスと自傷行為, 2016.
- 7) 文部科学省: 性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について(教職員向け), 2016.
- 8) 砂川秀樹: 性にかかわる問題と医療 LGBT や HIV をめぐって, 2012.
- 9) 大西彩乃: 日本における LGBT 特有の医療問題を解決する方法について, 2016.
- 10) 藤井勉: 対人不安 IAT の作成および妥当性・信頼性の検討, 2013.
- 11) 須長史生他: セクシュアルマイノリティに対する大学生の意識と態度: 第 1 報 - インターネットを活用した調査研究 -, 2017 .
- 12) 釜野さおり他: 性的マイノリティについての意識,2016 .
- 13) 潮村公弘: 潜在連合テスト(IAT)の実施手続きとガイドライン, 2015.
- 14) Greenwald, A. G. et al.: Measuring Individual Differences in Implicit Cognition: The Implicit Association Test. Journal of Personality and Social Psychology, 1998.
- 15) THE SANKEI NEWS: LGBT パートナー証明へ, 産経新聞社 2018.
- 16) 吉本圭佑: LGBT から SOGI への意識変換の重要性,2011.
- 17) 藤田美佳: 奈良教育大学における人権教育の取り組み-「夜間中学」、性的少数者に関する学習を中心に -.2016.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Akiko Tsuda, Kiyoko Yanagihara, Kyoko Nagata
2. 発表標題 Attitudes and Related Factors towards Sexual Minorities Among Japanese Undergraduate Students Majoring in Health Science
3. 学会等名 25th World Nursing and Healthcare Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akiko Tsuda, Ruka Saito, , Kyoko Nagata, Kiyoko Yanagihara
2. 発表標題 Awareness towards Sexual Minorities among Japanese Nursing students
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	斎藤 瑠華 (SAITO RUKA) (50846681)	金沢大学・保健学系・助教 (13301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------